

乳児保育における保育者の協働性 — 外遊びの支度の場面から —

奥新 恵理¹・七木田 敦²

Collaboration of caregivers in infant care — Case study of getting ready to play outside —

Eri OKUSHIN¹, Atsushi NANAKIDA²

Abstract: As research on non-cognitive abilities has progressed, the importance of infant care has grown. However, despite its importance, caregivers work in a wide range of capacities making it difficult to form relationships with caregivers. Therefore, the purpose of this study is to analyze the collaborative nature of caregivers in practical infant care situations from the perspective of dyadic-level and group-level sensitivity, and to provide a new perspective on the responsibility system in infant care. As such, it aims to provide a new perspective on the infant care system. For this purpose, we analyzed the relationship between caregivers from the perspective of these two sensitivities, based on a case study of a situation in which they were preparing for outdoor play. Results showed that caregivers can establish a bilateral relationship with the child by using their own collective sensitivities, without being bound by the framework of the responsibility system. In other words, it was suggested that if collaboration is generated through the caregivers' using their sensitivities, it is possible to construct a bilateral relationship with the child.

Key words: collaboration, infant care, dyadic-level and group-level sensitivity, sensitivity, responsibility system

1. 問題の所在

2018年の保育所保育指針の改定に伴い、0～2歳児の保育に関する記載が充実した。その背景には、1～2歳児を中心に保育所保育児童数が大幅に増加するなど、保育をめぐる状況が大きく変化したこと（厚生労働省 2018）、また、非認知能力などの研究が進み、Heckman（2013）によれば、乳幼時期において重要なのは、認知能力だけでなく非認知能力をしっかりと身につけることが、子どもの一生を通した育ちや生活に深く影響するとしている。また、汐見（2018）は、非認知能力はさまざまな活動を通して発達するが、その土台には0～2歳の時期に形成さ

れる保護者や保育者とのアタッチメント（愛着関係）や基本的信頼感が、非認知能力の育成において極めて重要としている。

このように乳児保育が重要視される中、保育所保育指針（厚生労働省 2018）には「アタッチメント」という言葉は使われてはいないものの、乳児保育において、一人ひとりの状態にあった保育を行うことや、特定の保育者の愛情深い関わりが、基本的信頼関係の形成に重要であること（厚生省児童家庭局 1999）が明確に述べられている。

このように乳児保育が重要視される中、1999年の保育所保育指針の改定で初めて「担当制」の言葉が取り入れられた。その後、「担当制」という言葉は、2008年の改定では、「柔軟な私たちでの担当制」、2018年には、「緩やかな担当制」と変遷し、「緩やかな担当制の中で特定の

1 広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期

2 広島大学大学院人間社会科学研究科附属幼年教育研究施設

保育士等が子どもとゆったりとした関わりを持ち情緒的な絆を深められるような指導計画を作成すること」(厚生労働省 2018)とされた。担当制とは、「子ども一人ひとりに担当する保育者を決め、主に、食事やおむつ替えなどの生活面で決められた保育者が担当して子どもに援助を行う保育方法」(秋田 2019)である。

しかし、保育の現状は、保育者不足を補うため、保育は多様な働き方をする保育者で構成されている。また、保育時間の長時間化に伴い、勤務体制が複雑化し時差出勤も複雑化している。実際、筆者が勤めていた保育園では、朝の勤務体制は4つの当番、夕方は、7つの当番で構成され、1日の勤務体制が小刻みに構成されていたため、保育者が度々入れ替わることとなり、細切れの保育になりやすく、特定の保育者との関わりが持ちにくい現状があった。

乳児保育は重要だとされている一方で、人員配置の基準がある(保育者と子どもの比率は0歳児では1:3、1・2歳児では1:6)。その基準では一人の保育者が担当の子どもを見るのが難しい。そのため、本来、保育者と子どもの二者関係をきちんと築くべきところを複数の保育者で関わり、お互いに補い合い重要な乳児期の保育を担っている。人員配置の基準はあるものの、グループサイズの規定はないため、比較的大きな子どもの集団を複数の保育者が保育するという状況が生じることがある。筆者は、1歳児18人を3人の保育者で保育をした経験がある。食事の時は、担当制をとっていた。2人の保育者が担当の子の食事についている時(その時は一人の保育者が2人の子どもの食事にあっていた)、他の子どもたち14人は一人の保育者が見ることになるため、もう一人、保育者が入室し、子どもたちと遊んでいた。このように、実際は、3人担任だが、担当制をとることで、もう一人保育者が必要な状態になる場合が多い。保育者不足が続いている中で、人員配置以上の保育者を入室させることは困難だったため、担当制を取ることをやめざるを得なかった。

秋田ら(2011)は、「保育者一人あたりの園児数が少なければ、保育者はより敏感に適切に対応でき、それに応じた保育環境や保育内容を提供できる」と述べている。しかし、そこには担当制であるかどうかの規定はない。これらから、担当制という保育方法だけではなく、保育者が他の保育者と協働しその動きを察知しながら保育するという保育者のかかわり方が重要に

なってくる。

保育実践における「連携」と「協働」の関係性について、吉池ら(2009)は「協働は目的達成のための手段的概念であり、連携は協働を実現するための更なる手段的概念」と述べている。これらのことから、保育者間の連携のありようを見ていくことで保育者の協働性が明らかになるのではないかと。また、協働性について、伊禮良(2015)は「自発的、積極的に行う協力であり、学校の教育目標達成を目指すために、教職員を一つの目標に向かって取り組ませる作用」とした。つまり、協働性を高めるために、目指す目標を共有し、その目標に向かって取り組ませる作用そのものが協働性であると述べている。しかし、目標を共有するだけで協働性が高まるとは考えにくい。保育者同士の連携について、保育の実践では、家庭とは違う集団での生活であり、保育者の一瞬一瞬の判断で行なわれている。特に、乳児保育の場合、子どもは自分の思いを言葉で表現することが難しいため、保育者には子どもの表情やしぐさから子どもの思いをくみ取ることが必要となる。そのため、保育者には子どものことや他の保育者の動きを察知するいわば保育の感性が必要である。

保育の感性について、Ahnertら(2006)は、「親と子どもとの二者関係において発揮される感性とは異なる可能性が指摘される」とし、それらを「二者関係の感性(dyadic-level sensitivity)」と「集団的感性(group-level sensitivity)」と捉えた。このうち二者関係の感性は「子どものニーズに敏感に応答する感性」であり、集団的感性は「集団全体に目を配りながら、子どもの個別性に敏感に応答しニーズに注意を払うこと」とした。しかし、それらの感性に関して、具体的に実践場面でのように現れ、それらがどのように関係しあっているかは検討されていない。

2. 研究の目的

これらのことを踏まえ、本研究では、乳児保育の実践場面における保育者の協働性を、二者関係の感性と集団的感性(Ahnert, Pinquart & Lamb, 2006)の観点から分析し、乳児保育の担当制について新たな視点を提供することを目的とする。

本研究では、二者関係の感性を「一対一のかわりの中で個人のニーズに対し迅速で適切な応答を提供すること」、集団的感性を「集団

全体に目を配りながら、子どもの個別性に敏感に応答し、ニーズに注意を払うこと」(Ahnertら 2006) とする。

また、本研究における乳児とは、「低年齢児保育にあたる0歳児及び3歳未満児における子ども(野澤 2016)」と定義し、協働性を伊禮良(2015)を援用し「保育者が組織内において自発的、積極的に個々の他者に対する感性性を発揮しながら同僚への支援、援助を行い、一つの目標に向かって取り組む姿」と定義する。

3. 研究方法

(1) ビデオによる観察

日常の保育の一部をビデオに録画し、ビデオの音声や動画より、保育者の言動を書き起こし、その中から保育者同士のかかわりを二者関係の感性性と集団的感性性の観点から分析した。書き起こした内容については筆者と研究者の2名で確認を行った。



写真3-1 小型ビデオ

本研究に使用したビデオは、202X年2月・3月の3日間、A保育園の0歳児クラス(男児5名、女児3名)と保育者3名の様子を撮影したものである。9時45分から12時までの約2時間、日常の一部を撮影した。撮影時間は4時間51分である。

上記の調査期間ではあるが、本稿においては、2月の外遊びの支度の場面の事例を挙げることにする。小型ビデオ(写真3-1)を0歳児クラスにおき、筆者が保育室の外からビデオを操作する非参与観察法をとった。保育者である筆者が保育室に入ること、保育者間の協働性に筆者の存在が影響することが考えられたためこの方法をとった。

保育者3名の属性を下記の表に示す。

表4-1 保育者の属性

	年代	保育経験年数	勤務形態
保育者A	30代	10年	正職
保育者B	40代	23年	クラス補助
保育者C	50代	15年	クラス補助

(2) 倫理的配慮

録画したビデオについては、研究協力者と研究協力園に内容の確認を行ったうえで、研究に

使用することを説明した。あわせて、研究協力者と研究協力園には、個人が特定されることのないよう配慮すること、また、得られた情報に関して、研究者が責任をもって管理することを口頭および文面で約束した。映像を含め記録を研究に用いることについては、園から保護者に了解を得ている。

4. 結果と考察

下記の事例は、子どもたちが保育者と一緒に外遊びの支度をする場面での保育者同士のかかわりの様子をあらわしたものである。また、後日、録画した場面を、それぞれの保育者に別々に見てもらい、その時の自分の行動の思いを語ってもらった。表1は、外遊びの支度の場面での保育者A・B・Cのかかわりの様子を二者関係の感性性と集団的感性性に分類したものを示している。

【事例 外遊びの支度をする場面】

(2021年2月X日)

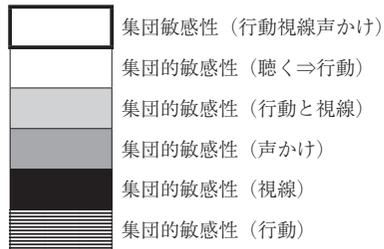
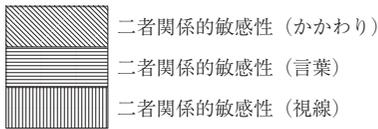
保育者Cが子どもたちに①「外に出る支度をしようかね。」と声をかける。その言葉を②保育者Aが聴き、ジャンパーと帽子が入った箱を取りに行く。保育者Bは子どものそばに座ったまま、保育者Aの動きと子どもたちの動きを見ている。

保育者Cが「それじゃ、どうしようかね。」といった後、しばらく考え、①「靴下を履いてからにしよう。」とボソツという。すると、①その声を聞いて保育者Aが靴下に入った箱を取りに行き、「靴下おいで。」と、少し広めの空間に立ち、一人ひとりの名前を呼んで靴下を配る。子どもたちは、保育者Aの周りに集まり、名前を呼ばれるのを待っている。

②保育者Cは、別の少し空いた空間で靴下をもらった子を自分の膝にのせ靴下を履くことを手伝う。子どもたちは、保育者Cの周りに靴下を持って「履かせて」というように集まってきた。一方、③保育者Bは、靴下の場所から少し離れたところで、ジャンパーを取りやすいように並べていた。保育者Aは靴下を配り終わると、④②に靴下を履かせながら靴下を履かずに周りの様子を見ている③を見つけ声をかける。②に靴下を履かせ終わると、③を自分の膝にのせ靴下を履かせた。子どもたちは、④靴下を履くとジャンパーの方に自然と向かった。保育者Bは

表4 外遊びの支度の場面での保育者のかかわり

時間	子どもの様子	保育者 A (サブ)	保育者 B (フリー)	保育者 C (リーダー)
9:50	ペープサートを片付ける様子を見る	ジャンパー・帽子を持ってくる。	子どものそばに座って子どもの反応を見る	ペープサートを片付けながら「外に出ようかね」
	「ゴーゴー」と喜ぶ		保育者 A と子どもの様子を見る	「靴下を履いてからにしよう」
	保育者 A の周りに集まる	靴下を持ってくる	クッションを片付ける	空いている場所に座り、靴下を持ってきた子に履かせる。
			ジャンパーを片付ける	
「はい」と返事をし、靴下を取りに行く	それぞれ靴下を履く子の援助をする。			
9:52	自分達で外に出る支度をしようとする	②に靴下を履かせながら靴下を履いていない子に声をかける	自分の近くにいる子にジャンパーを着せる	靴下を履く子の援助をする。
		保育者 B を見て帽子を配る		ジャンパーを着ることを援助する



そばにいる子にジャンパーを着せた。そのようすを見て、保育者 A は帽子を配る。

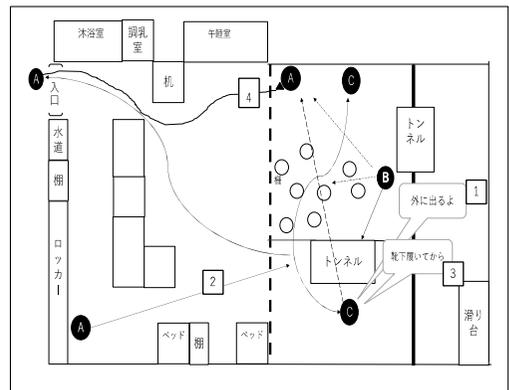
(1) 子ども全体への声かけと他の保育者の声を聴く

保育者 C が「外に出る支度をしようかね。」と子どもたちに声をかける①。その言葉を聴き保育者 A がジャンパーと帽子を取りに行く②。保育者 C の「靴下を先に履いてからにしよう。」③という独り言のような「つぶやき」も保育者 A が聴くことで、子どもたちが広いスペースで靴下を履くことができるような位置に靴下入れを持っていく行動をしている④。これは集団的敏感性の中の「他の保育者の声を聴いてからの行動」にあたる。また、保育者は子どもの声だけではなく、他の保育者の声も聴き行動していることが見てとれた。

このことについて、「どうしてあの場所へ行ったのか。」と訊ねたところ、保育者 A は、「こっちの広いところだったら時間差で子どもが自分

で靴下を取りに来れると思ったのでこっちに来たんだと思います。」と後から自分の行動を振り返った。

また、録画を見ながらそれぞれの保育者がどのような思いをもって保育をしているか訊ねた



← 行動 ←--- 視線 ● 保育者 ○ 子ども

図1 保育者のかかわり

ところ、3人とも「自分でやってみたいと思える子になってほしい」という共通の思いがあった。このような共通の思いのもと、3人の保育者が他の保育者の思いも汲みとり、行動していたといえる。つまり、この行動は、3人の保育者の共通の思いがあってこそもたらした行動だといえる。

(2) 他の保育者の位置の確認

保育者Aは、部屋の隅に立ち、子どもの名前を一人一人呼び靴下を配る①。その様子を見て、保育者Cが保育者Aと離れた場所に座ることで、子どもたちが靴下を履く空間を確保することができた②。子どもたちは、保育者Cの周りに集まり、自分の靴下を差し出し、援助を求めたり、自分で履こうとしたりしている。保育者Cが他の保育者の位置を確認し離れた位置に座ることで、子どもたちがぶつかり合うことなく、自分のペースで靴下を履くことができていた。また、靴下がなかなか履けない子は、子どもたち自らが援助を求める視線や表情を送り、保育者も子どもの発する視線や表情を察することができ、その子に応じた援助を行っていた。他の保育者の位置を感じる集団的感性の「視線」を働かせることで、ゆとりのある空間を確保することができた。そして、集団的感性を働かせた後は、二者関係の感性を働かせ、子どもたちに応じたかかわりをしていた。

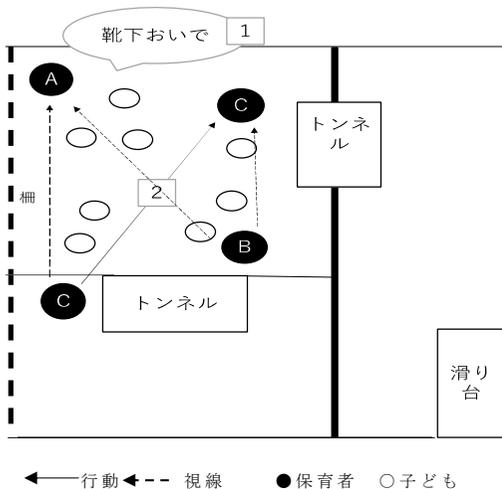


図2 保育者のかかわり

(3) 子どもの動線考えた行動

保育者Bは、靴下を履いた子どもたちが、ジャンパーをすぐ着ることができるよう事前にトンネルの上にジャンパーを並べ、子どもたちが

来るのを待っていた①。この場面について、保育者Bは、「(他の保育者と)同じ動きをしてもあれだし。」と、他の保育者とは違う動きをとることを意識していたことを後日話した。その後、靴下を「はかせて」と持ってきた子がいたため、保育者Bは、その子を自分の膝にのせ靴下を履かせた。これは、二者関係の感性の「かかわり」にあたる。靴下を履かせ終わると、すぐジャンパーを着せることができ、子どもを待たせることはなかった。保育者Aは靴下を配り終わると移動し②、自分で靴下を履くことができない子を援助していた。また、保育者B・Cも全体を見ながら、子どもたちが靴下を履いているかを確認し、まだ、履けていない子がいるとそばに行き援助していた。これらは集団的感性の中の「行動と視線」といえる。

このことについても、後日、保育者Cは、「靴下を履けた子が出てきたら、B先生が上着を準備していくみたい。一斉に終わって、一斉にじゃなくて段階をおいながら……多分、そういう他の保育者の動きを見ながら動いているんだと思います。」と語ったように、他の保育者の動きを見ながら、子どもの動線も考えていたといえる。

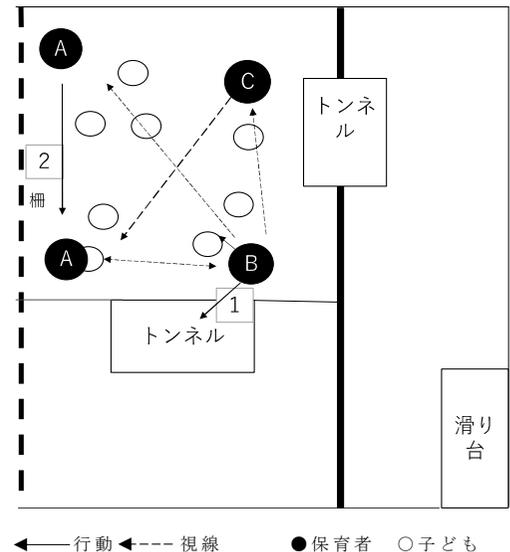


図3 保育者のかかわり

(4) 一人一人の子どもにかかわりながらも全体への配慮

保育者Aは靴下を履けない子に、直接手を差し伸べたりそばで靴下を履く様子を見守っていたりしていた。また、一人の子にかかわりな

がらも、全体に目を配り、必要に応じて援助をしていた。例えば、全体に目を向けていたため、靴下を履かずに、周りの様子を見ていた子がいることに気づき、その子に声をかけ、一緒に靴下を履くように促していた。その子は、保育者 A と目が合い、声をかけられることで、靴下を履くきっかけになったといえよう。これは、保育者 A が一人の子にかかわっていただけでは生まれたい関係である。つまり、保育者 A が集団的感性の「行動・視線・声かけ」を働かせていたために生まれたものではないかと思われる。

4-1 考察

外遊びの支度の事例では、一人の保育者が発した「靴下を履いてからにしよう。」という言葉をも他の保育者が聞くことで、保育者の次の行動の見通しがたつた。つまり、ジャンパーや靴下を着たり履いたりする場所を確保する人、そして、子どもの動線を考え、ジャンパーを並べて待つ人に分かれ、子どもの流れを作っていた。乳児の場合、生活のほとんどが大人の手に委ねられているため、外に出る準備を全て自分ですることは難しい。そのため、保育者の援助が必要となる。3人の保育者が子どもの動線を考え、別々の行動することで流れを作り、子どもたちを待たすことなく、外へ出る支度が子どもたちと一緒にできた。子どもたちも、次の行動の見通しがたち、子ども自らが靴下を履くなどの行動していた。子どもの自分でやりたい気持ちが途切れないよう、保育者が他の保育者の動きを見ることで、次の行動をとることが必要となる。言い換えれば、それぞれの保育者が「視線」や「他の保育者の声を聴く」などの集団的感性を働かせることで、次の行動をとるという連携がなされ、協働性が構築されたのではないかと考えられる。

また、二者関係の感性を「かかわり」としているが、その感性の中には「言葉掛け」もあり、「微笑む視線」もあることが示された。そして、集団的感性を3人の保育者が同時に働かせている時もあったが、その感性の働かせ方は、「視線」「声かけ」「行動」と違っていた。3人がそれぞれ感性を働かせることで、子どもたちの動線を考慮した位置に保育者がいることになり、子どもたちも円滑に準備ができていた。そして、集団的感性を働かせた後は、二者関係の感性を働かせ、子どもたちが自分で

靴下を履きたい気持ちを察していた。時には見守りながら、子どもたちが発する視線や仕草を感じた時には、さりげなく援助し、子どもとかわっていた。子どもたちの気持ちが保育者に通じる場面でもあった。

5. 総合考察

本研究の目的は、乳児保育の実践場面における保育者の協働性を二者関係の感性と集団的感性の観点から分析し、乳児保育の担当制について新たな視点を提供することであった。

乳児保育において、子どもと保育者の人員配置の基準はあるが、グループサイズの基準はない。そのため、1クラスに複数人数の保育者が入り、複数の保育者が子どもとの関係を築くため、他の保育者の言動を察しながら保育を進めている。その場合、相手の保育者が今何を考え、また相手が次にどのように動くかを常に察しながら瞬時に自分自身の動きを決め実践することが重要である。

乳児保育の担任となった場合、経験年数や年齢、勤務形態の異なる保育者同士が組むことが多く、その担任間の力量で保育が進められている。また、保育者間の相性が強く影響することも多く、それにより保育の質も変わってくる。現在、保育者不足も問題視されている中、子どもとの一対一の関係を築きにくい状況がある。その中で、どのような保育者の関係性が、乳児保育の質の向上ひいては重要な乳児期の発達に寄与するかを考えることが大切である。

Ahnert ら (2006) は、集団的感性について「集団全体に目を配りながら、子どもの個別性に敏感に応答し、ニーズに注意を払うこと」とし、集団的感性の重要性を示した。

このことについて、本研究の保育実践事例から、集団全体に目を配ることは、「子どもの動きを見る」だけではなく「他の保育者の声を聴く」「他の保育者の動きを見る」など他の保育者のことも敏感に感じとっていたことが見出された。特定の大人との関わりを重要視する乳児保育において、そのかかわりは、一人の保育者とのかかわりだけにおいて生まれるものではない。また、この保育実践の事例から、他の保育者が集団的感性を働かせることで、子どもとの二者関係を構築できるようにしていることが示された。つまり、保育者が他の保育者の言動を敏感に感じとることで、子どもと保育者の一対一の関係が構築されるといえよう。

協働性について、金子（2018）は、「共通目標を設定し相互にサポートしながら各自の役割を果たすこと」とし、協働性を高めるためには複数の保育者が共通の目標を設定することが必要だとした。しかし、本研究から、共通の目標を設定するだけでなく、子どもにかかわる瞬間を保育者が捉え、その瞬間に複数の保育者が他の保育者の言動に対して、それぞれの感性性を働かせることが重要であることが示された。つまり、保育者が他の保育者を敏感じとすることで、協働が生まれ、子どもとの二者関係が構築されるといえる。乳児保育では特定の大人との関わりが重要視され、保育者には二者関係の感性性を働かせることが大切だと考えられている。初塚（2010）も乳児保育において、「特定の保育者が1人の子どもに継続的に関わるという体制をとることが望ましい」と述べ、担当制の重要性を述べている。しかし、担当制というシステムだけが、子どもとの一対一の関係を築くものだとは限らない。保育者と子どもの二者関係の感性性をもたらしめているものは、他の保育者が集団的感性性を働かせ、保育者間の協働性を構築しているからだということが示唆された。

一見、乳児保育における担当制と保育者の協働性は相反するものに考えられる。しかし、保育者の持つ感性性を働かせることで生まれる保育者間の協働があれば、担当制の枠組みだけで考えなくとも保育者と子どもとの二者関係を構築できるのである。言い換えれば、担当制という方法にこだわらなくても、保育者がそれぞれの集団的感性性を働かせることで、子どもとの二者関係を築くことができるといえる。

6. 今後の課題

本研究は、乳児保育の外遊びの支度をする場面での保育者の協働性を、二者関係の感性性と集団的感性性の観点から分析し、乳児保育の担当制について、新たな視点を提供することを目的とし、担当制について新たな知見を得ることができた。しかし、本研究では、担当制を行っていないとされるクラスでの観察場面から保育者の感性性に焦点を当て検討した。担当制の新たな視点を提供するためには、担当制を行っているクラスにおいての保育者の感性性にも目を向ける必要がある。担当制と担当制でない場合の保育者の感性性の働かせ方の違いを比較・検

討することで、保育者の協働性について新たな切り口を見出せるのではないかと考え、このことは、今後の課題としたい。

引用参考文献

- Ahnert, L., Piquart, M., & Lamb, M. E. (2006) Security of children's relationships with nonparental care providers: A meta-analysis *Development*, **77**. pp.664-679.
- 秋田喜代美 (2019) 保育学用語辞典 中央法規 91頁
- 秋田喜代美 佐川早季子 (2011) 保育の質に関する横断研究の展望 東京大学大学院教育学研究科紀要 第51巻 217-234頁.
- 初塚真喜子 (2010) アタッチメント (愛着) 理論から考える保育所保育のあり方 相愛大学人間発達学研究 **1** 1-16頁.
- 伊禮良栄 (2015) 教職員集団の協働性に関する研究－職員研修の企画・立案を通して－ 沖縄県立総合教育センター 第57集 研究集録.
- James J. Heckman (2013) *Giving Kids a Fair Chance*. The MIT Press 古草秀子 (訳) (2015) 幼児の教育の経済学 東洋経済新報社.
- 金子恵美 (2018) 協働に必要な「専門性」と「人間性」を培う「研究だより」 第28号 社会福祉法人日本保育協会 保育科学研究所 5頁.
- 厚生労働省編 (2018) 保育所保育指針解説 フレーベル館.
- 厚生児童家庭局 (1999) 保育所保育指針 保育指針研究会編集.
- 野澤祥子 淀川裕美 高橋翠 遠藤利彦 秋田喜代美 (2016) 乳児保育の質に関する研究の動向と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要 **56** 399-419頁.
- 汐見稔幸 (2018) 保育所保育指針の改定を受けて－保育の現場に期待したいこと 無藤隆 汐見稔幸 大豆生田啓友 3法令から読み解く乳幼児の教育・保育の未来 中央法規 9-12頁.
- 吉池毅志 栄セツコ (2009) 保健医療福祉療育における「連携」の基本的概念整理－精神保健福祉実践における「連携」に着目して－ 桃山学院大学総合研究所紀要 第34巻 第3号 109-122頁.